

井尻正二会員を偲ぶ

後 藤 仁 敏*

1. 井尻氏の生い立ち

1999年12月1日、本会会員で本会の創立者のひとりである井尻正二氏が東京都世田谷区の久我山病院で逝去された。7年前に発病した膀胱癌で、9回の手術の結果の死であった。享年86歳である。

井尻氏の生涯と業績については、多くの面から、多くの人々の協力によって研究されなければならない。ここでは、編集委員会からの依頼により、古生物学者としての井尻氏にたいする、私なりのささやかな追悼文をしたため、長年にわたる師の恩に感謝の意を表したい。

井尻氏は1913年6月、小樽市に生まれ、幼い頃から北海道の豊かな自然のなかで動物採集にいそしみ、ファーブルの『昆虫記』を愛読して育ったという。高校時代に、母方の伯父・動物学者の谷津直秀氏の影響を受け、古生物学の道に進むこととなる。

1933年に東京帝国大学理学部地質学科に入学、36年に同学科を卒業、大学院に進学するが、指導教授と研究テーマをめぐって対立し、わずか2カ月で退学する。以後、東京科学博物館（現在の国立科学博物館）嘱託などを勤めるかたわら、歯の化石の研究をはじめ、近所の歯医者さんのつてを頼ってたどり着いた、東京高等歯科医学校（現在の東京医科歯科大学歯学部）の図書室で藤田恒太郎教授に出会い、以後、同教授の指導のもと、同校の解剖学教室でデスモスチルスの歯の研究を進める。

2. デスモスチルスの研究

氏は、「日本的で世界的なテーマ」として博物館にあった第三紀の謎の多い哺乳類・デスモスチルスの歯化石を研究テーマとして選んだ。その研究成果は、1937年の「古生物学における歯式の問題」の論文からはじまって1940年の「*Desmostylus* の歯の個体変異に関する一研究」までの「地質学雑誌」に掲載された5篇の論文として報告されている。



写真1：1991年11月に池袋で開催された地学団体研究会の理論の学習会で、講演する井尻正二氏。小寺春人氏撮影。

氏はさらに、1942年から翌年にかけて、イヌを用いた歯胚の移植実験により歯の萌出機序の研究を行っている。これらの研究では、氏が学んだ歯の解剖学・組織学・発生学の知識が生かされ、また、当時としては最先端の技術であった光学顕微鏡を用いた歯の古組織学的研究や外科的移植実験まで行っている。氏はまた、一論文ごとに、後に執筆する『古生物学論』（後の『科学論』）に述べる記載・分類・論理・理論・実験・条件の方法を実践しているのである。

また、この頃、多くの地質学者との共同による新しい集団的研究方法として団体研究法を発想する。

戦後、1947年には、有志とともに団体研究の推進と学界の民主化を掲げて地学団体研究会を創立し、地質学会の民主化を進める。翌年12月には、第1期学術会議会員に牛來正夫氏とともに当選、民主主義科学者会議の幹事にも就任する。

1949年2月、最初の著書『古生物学論』（平凡社）を出版、5月、東京科学博物館地学科長に就任、8月には大学時代の同級生・松本達郎氏の紹介で、九州大学より「*Desmostylus japonicus* を中心とする哺乳動物歯牙形態発生理論の一考察」の論文で、理学博士の学位を

Masatoshi Goto : Mourning over the death of Dr. Shoji Ijiri

* 鶴見大学歯学部解剖学教室



写真2：1977年12月，“脊勉”の忘年会にて、下段左より、高橋正志、筆者、井尻正二、笹川一郎、中段左より、吉田健一、小澤幸重、寒河江登志朗、三島弘幸、上段左より、小寺春人、犬塚則久、澤村 寛の諸氏。

授与される。しかし、同年11月、レッド・パージにより、国立科学博物館を“依願退職”となる。すなわち、36歳にして職を奪われたのである。

普通の人なら、ここで研究生活を諦めるより他ないのであるが、氏はさらに旺盛に研究活動を続けたのである。

すなわち、デスモスチルスの研究を続けるとともに、1955～58年には、化石の歯のX線分析や電子顕微鏡による研究を行っている。また、1952年と58年には藤田至則氏と共同で、下総層群の「化石床」を対象とした化石の成因に関する研究を発表している。化石の中の有機物の研究ではアメリカのP. H. Abelson に先を越されはしたが、1959～60年には、藤原隆代氏と共同で、化石の歯に残されたコラーゲン上に石灰化が起こる実験をするなど、つねに時代の最先端の研究手段を古生物学に導入している。

3. 化石研究会の創立と古生物学の体系化

それらの研究を進めるなかで、とくに古生物学会の会則の非民主的改悪を契機として、氏は大森昌衛氏らと化石研究会を創立する。当時の本会の目的は、化石の微細構造・古生化学の研究、古生態学の研究、進化論の研究の3本柱であった。

氏は、これらの課題を先頭にたって推し進めた。化石の微細構造・古生化学の分野では藤原隆代・秋山雅彦・堀田進氏らを育て、亀井節夫氏らと象団研・長鼻類団研を指導した。古生態学では、鈴木誠・郷原保真・新堀友行氏らと野尻湖の発掘を組織し、第四紀の古環境復元とナウマンゾウと旧石器時代の人類遺跡を復元した。進化論については、1987年より1992年にかけて、化石研究会で古生物学的進化論の体系化についての勉強会を提唱し、会誌に発表している。氏の進化論の体系は、ダーウィンの進化論を基礎として、そこにラマルクの獲得形質の遺伝やヘッケルの反復説を含

んだ総合的な体系である。

氏はまた、『古生物学論』『古生物学汎論』『古生物学各論』『実験古生物学』の4部からなる古生物学の体系をつくることを提唱している。そして、『古生物学論』（平凡社、後に『科学論』築地書館）を1949年に、『古生物学汎論』の上巻を『古生物学（上巻）』（理論社）として1956年に、上下2巻（築地書館）を1972年に執筆し、化石研究会会員の協力で『実験古生物学』に当たる『化石の研究法』（共立出版）が1971年に、氏の還暦を記念して多くの古生物学者の協力で『古生物学各論・全4巻』（築地書館）が、井尻正二監修として1973年から81年にかけて出版されている。

このような古生物学の体系は外国にもない独特のものであり、また他の学問分野でもそのような体系を私は知らない。

4. 古生物学の普及

科学博物館退職後、氏は、1963年から69年までの6年間、東京経済大学の一般教養地学担当の教授を勤めた以外は、非常勤講師として幾つかの大学の教壇に立つことはあっても、定職につくことはなく、在野の科学者として、もっぱら著述業で生きてきた。

氏の著書数は、150冊以上に及んでいる。その分野は上記した古生物学の専門書から、科学の普及・啓蒙書、絵本・漫画、古生物学をヒトの成長に応用した保育書、さらには科学の方法論・認識論から、生物進化や人間社会の歴史まで貫く、根本法則としての弁証法の研究書（哲学書）まで、じつにさまざまである。

これらのなかでよく知られているのは、3冊の岩波新書『地球の歴史』『日本列島』『化石』（前2著は湊正雄氏と共著）である。光っているのは、生物の進化を漫画としてまとめた漫画家・伊東章夫氏との共同作成の科学漫画シリーズであろう。また、画家・金子三蔵氏との共同制作の『図説・地球の歴史』（高陽書院、湊正雄氏と共著）、『ヒトの直系』（大月書店）や絵本シリーズ（福音館、築地書館）、さくら・さくらんぼ保育園の斉藤公子氏と共同による『保育大学シリーズ』（築地書館）もユニークなものである。

井尻氏の著作のエッセンスは、氏の70歳を記念して出版された『井尻正二選集（全10巻）』（大月書店）にまとめられている。しかし、選集刊行以後86歳で死ぬまでの間に、26冊もの著書をものしていることは、驚異ともいえる。

5. 師のおもかげ

私が井尻正二氏の名前と出会ったのは、高校一年生の秋であった。名古屋のある書店で『自然と人間の誕生』（学生社新書）という本を書棚から取り出した私

は、その本の魅力に取りつかれ、一気に読んだ。その時の興奮はいまだに忘れられない。それはまさに当時の私の悩みに応える本だった。人間とは、人生とは何か、恋愛とは何かなどの疑問に対して、地球と生物、人類の歴史を踏まえて答えていた。その後の私の生き方を決めた本といえる。

井尻正二氏との出会いは、大学一年生の5月、大学祭の打ち上げの帰りに、池袋で藤田至則氏らといっしょの井尻氏に偶然に会ったのが最初だった。先輩たちと意気投合して、「家に来い」と言われ、大勢で池袋西口のお宅に押しかけた。私はまだ酒の飲み方も知らず、気分が悪くなってしまい家に泊めていただくことになった。翌朝、目覚めると部屋の床から天井までぎっしりと本が並んでいる。すごい部屋だった。朝食をごちそうになって、早々に下宿にもどった。氏の第一印象は、何よりも背が高いことで、私はきびしい眼差しの中にほのかな優しさを感じた。

その後、大森昌衛氏の紹介で、本づくりのアルバイトを依頼された。『人体の矛盾』、『生きている化石のなぞ』などをお手伝いして、本づくりの基礎を学ぶことができた。以来、35年、褒められたことよりもきつく叱られたことの方がはるかに多かったが、つねに近くにいる、研究や本づくりなどのさまざまな仕事を手伝ったり、家の相棒ともども理論の勉強会（後に“脊勉”となる）をやったりしていただきながら、自分の研究や進路について相談することができたのは、本当に幸運であった。

氏原稿の執筆の仕方は、きわめて独特であった。はじめに第1稿として全体の項目を1枚の紙に書き、次に第2稿として各項目に数行の要旨を書く。そして、第3稿として各項目について各1枚程度内容を書き、第4稿として各項目について数ページ書き、最後に第5稿として全体を執筆する、といったやり方だった。一つ原稿を書くのに最低2カ月はかけるのだ。

氏は、原稿の執筆には愛用の万年筆以外は用いられることはなかった。最近のワープロなどに対しては、「執筆能力の効率化、思考能力の低下」と書いていた。万年筆と紙との筆圧などの関係が、氏の思考過程と調和していたのであろう。

氏原稿の一部は、市立小樽文学館に保管されており、氏原稿執筆過程と思考過程の研究をすることはきわめて興味深い課題であらう。

6. 師の後ろ姿を追って

井尻氏の古生物学の研究論文の数は他の研究者と比べて決して多いとはいえない。しかし、論文の一つ一つが新しい研究手段、新しい研究方法によるもので、氏はつねにまっすぐ掘り下げる「先山」として研究の

最前線にたって仕事を進めてきたのである。「後山」としての著作は、死のひと月前に出版されたブックレット1冊のみに終わった。

氏が指導教授と対立することなく東大地質教室に残っていたら、あるいはレッド・パージに会うことなく科学博物館に残っていたら、どんな研究を展開したか、おそらく想像も及ばない業績を残したことだろう。しかし、つねに否定的生活にもとづく否定的精神に支えられていたからこそ、氏の業績がつくられたとも見ることができる。

私は、魚類と哺乳類の違いこそあれ、同じ脊椎動物の歯の古生物学を専攻し、井尻氏を師と仰ぎ、師の後姿を必死で追いかけてきた。しかし、氏は私を自分の学問上の弟子とか後継者とみる向きはなく、つねに「自分の古生物学をつくれ」と言われた。そして、「師の恩に報いる道は、その否定的精神をうけつぎ、師の業績を乗り越えて進むことにある」と書いておられる。

私たちは、たしかに、いくつかの個別の分野で師の業績をしのぐことはできたかも知れない。しかし、全体からすれば、師はどんどん前に進み続け、最期までその距離は広がるばかりで縮まることはなかった、というのが私の実感である。

氏の遺体は、生前の遺志によって鶴見大学歯学部に献体された。解剖実習用ではなく、骨格標本にしてほしいとの希望で、これから標本づくりが始められる。「私自身も、最後に化石のなかまいり」をしたい（『化石』岩波新書）との遺志による。

氏は、つねに科学の最先端に興味をもち、最近でも臓器移植や生物工学、分子生物学の進歩に非常に興味を示されていた。死によってその思考は停止したのであるが、私には、氏の思考は永遠の生命体となって、21世紀はおろか、はるか人類の遠い未来まで飛んでいたような気がしている。

そこでは、科学者や労働者がその思想によって職を奪われることもなく、搾取も公害も戦争もない豊かな社会が実現していることだろう。井尻氏は、雲の上のそのような未来社会から、地上でつぎつぎとあらたに起こる現実の諸問題への対応に翻弄される私たちを、笑いながら眺めておられることだろう。

こころより、恩師・井尻正二氏のご冥福をお祈りする次第である。

(1999年12月20日)